方法論としての民俗誌

高見寛孝*

要約　柳田國男の代表的著作『北小浦民俗誌』に対して、福田アジオ一派はその成立の不備を批判し、北小浦で調査を実施した。だが、そこには大きな勘違いがあった。柳田國男は北小浦の民俗を記録する報告書として『北小浦民俗誌』を書いたのではない。重出立証法を補う方法論としての民俗誌を用い、日本の歴史と文化を解明するために同書をまとめたのである。このことを、柳田自身の語りを中心に論証した。

キーワード：民俗誌・重出立証法・憂国の学問・実験の史学・サラリーマン民俗学者

一　はじめに

柳田國男批判に情熱を燃やし続けている福田アジオは、柳田の代表的著作『北小浦民俗誌』を取り上げて、弟子たちとともにその成立過程について詳細な分析を行っている。[1] その研究動機のひとつは、『北小浦民俗誌』に対し篠原徹が投じた、北小浦で調査を実施していない柳田國男に民俗誌など書けるはずもないとの疑問[2]であったと思われる。篠原自身、柳田が利用したと主張している倉田一郎の「採集手帖」以外に、柳田はいくつもの資料を用いて『北小浦民俗誌』を書き上げていることを論証しており、福田一派の調査研究は、篠原の提言に導かれたものであったようだ。

その調査研究を総括する論稿「『北小浦民俗誌』の意義と評価」の中で福田は、「確立期柳田国男の民俗学の特色は、日本全国から資料を集積し、それを類型化し、比較することで日本全体としての変遷課程を組み立てるところにある」[3]と、従来から主張している自説をここでもはばかることなく披露している。「確立期」とは昭和十年頃を指し、「日本全体としての変遷課程を組み立てる」とは資料操作法の重出立証法を指している。

福田は「あるべき民俗学」は重出立証法を放棄し、「伝承母体において相互連関して伝承されている民俗事象を分析し、歴史的展開過程についての仮説を提示する個別分析法を方法とすべきである」[4]と主張するわけであるが、ここには大きな見落としがいくつもある。

ひとつは、重出立証法によって導き出される結論も仮説であって、歴史を証明するものではない。柳田もそのことは十分に承知していた。だからこそ、その仮説に基づき、一定の地域で調査研究を行うの

二〇一九年一一月三〇日受付

＊　江戸川大学　現代社会学科非常勤講師　日本民俗学

である。このことを柳田は「実験」と呼んでいる。おそらく「実地体験」の略語であろう。壬申の乱や桶狭間の戦を我々は体験することができない。だが、伝承文化としての民俗であれば、各調査地において体験することができる。柳田が日本民俗学のことを「実験の史学」[5]と呼んだのはそのためである。

「実験の史学」は、日本人・日本文化を射程とした「憂国の学問」であるから、一地域のみの歴史や文化を明らかにしようとするものではない[6]。福田の個別分析法とは原理的に相容れない。もちろん、学問としての優劣を競うべきものではない。価値観が違うのである。そのため篠原や福田一派など、『北小浦民俗誌』が「どのように」書かれたのかを追及している人たちにとって、日本民俗学の基盤となっている「実験の史学」も「憂国の学問」も重要ではないようで、一顧だにされていない。ただの報告書としか見えていないようである。『北小浦民俗誌』が重出立証法を補う方法論として書かれたものであることを見抜いていたのは、谷川健一[7]と後で取り上げる千葉徳爾より他に知らない。

筆者は谷川や千葉と同じく、柳田國男が『北小浦民俗誌』を「どのように」書いたのかよりも「なにゆえに」書いたのかに興味を有している。「なにゆえに」を問う場合、「実験の史学」と「憂国の学問」は重要なキーワードとなる。このふたつのキーワードから『北小浦民俗誌』の成立を論じることとする。まずは、柳田國男の方法論を確認することから始めよう。

二　柳田國男の方法

柳田國男によって樹立された日本民俗学は、国民の日常生活の中に伝承されてきた民俗を研究素材として扱う。その際注目されるのが、民俗の地域差である。日本列島上に伝承されている民俗を比較すると、地域によってその内容に相違が見られる。これが民俗の地域差であるが、その解釈には三つの視座が考えられる[8]。仮にここでは視座A・視座B・視座Cとしておこう。

視座A

視座Aは、地域差を時代差、つまり変化相の差と見なす解釈である。元々は同じ民俗が時間とともに変化していくのであるが、変化のスピードが地域によって異なるため、地域毎に様々な変化相の民俗が伝承されていることになる。この解釈の前提条件としては、民俗を生み出し変化させている土壌の同質性が求められる。日本列島上においては、どの地域においても同じ変化の過程を辿るわけで、各地域に伝承されている民俗は地域毎の事情によってそれぞれの変化相に留まっているに過ぎない。そこで全国から同じ種類の民俗を集めて比較すると、変遷過程を復元することができる。この方法が「重出立証法」と呼ばれているものである。もっとも、重出立証法は民俗の変遷過程の復元ばかりでなく、失われた民俗の意味を導き出す方法としても利用されるが、ここでは触れないでおく。

どの地域の民俗が古い変化相を保持しているのかということについては、山間地や離島など、他の地域から隔絶された場所が想定された。そのひとつのきっかけとなったのが椎葉村での体験であった。宮崎県東臼杵郡椎葉村で猪狩の話を聞いた柳田國男は、『後狩詞記』と題する書にまとめて刊行する。明治四二年のことであった。

その年から遡ること四百四十五年前の寛正五年、室町幕府に仕えていた多賀高忠は弓矢を用いる鹿狩の話を「狩詞記」と題する一文にまとめている。その狩猟の民俗が、椎葉村では眼前の事実として伝承されていたのである。その時の感慨を柳田は『後狩詞記』の中で、「山に居れば斯くまでも今に遠いものであろうか。思うに古今は直立する一の棒では無くて。山地に向けて之を横に寝かしたようなのが我国の

さまである。[9]」と書き記している。

この柳田の感慨に対して赤坂憲雄は、「平地で体験される時間とは異質な時間の流れに浸された場所として、山が柳田によって発見されたのである。山という名の空間的な異界はまた、時間的な異界でもあった。[10]」と解説しているが、この解釈は間違っている。山地が平地と異質な空間・時間であるならば「一の棒」という表現はせずに、「二本、三本の棒」という表現をしなければおかしい。

重出立証法を前提とした場合、柳田は日本列島の居住民とその文化をひとつの民族、同系同質の文化と見なす立場に居た。それを示す文章はいくつも残されている。少し紹介してみよう。

文章①「変化の色々の段階が地方的に異なるというのみで、本来一つの根源に出づることは、比較をした人ならば疑うことが出来ぬ。[11]」（昭和二年）

文章②「民種が一つで無く文化が源を同じくしなかったら、是までの著しい偶然は到底一致する筈がなかった。[12]」（昭和三年）

文章③「現在人の住んで居る島は四百以上、北は蝦夷の海の利尻礼文から、南は八丈の向うに在る青ヶ島、更に琉球列島の果の波照間や與那国島に至るまで、何れも元は一つであった民族が村を為し、個々の改定の幾つかを加えつゝ、同じ一つの国語を話して居る。[13]」（昭和八年）

文章④「もと〳〵同じ民族だから始めは皆同じ事であったものと、一応は推定して置いてよい。[14]」（昭和十八年）

このように柳田は、日本人の単一性と日本文化の同質性を重出立証法の前提と考えていた。だが、重出立証法で導き出される結論はあくまでも仮説であって、法則を示すものではない。だからこそ次のように説明するのである。

文章⑤「すべて全国に共通していながら、少しずつ程度の違ったいくつかの生活事相を並べて、その間にこれとこれとが、どっちが早くはじまったか、最初に実は同じものだったのが、分岐してこうなっただろうということを証明しなければならない。その次にこのほうが古くてこのほうが新しい、ということを、あらゆる方法をつくしてきめようとする。[15]」（昭和二五年）

ここに述べられている「あらゆる方法」の中には、重出立証法や文献の活用以外に、民俗誌的方法も含まれていた。重出立証法はあくまでも仮説を導き出すための予備的方法にしか過ぎない。このことはすでに千葉徳爾[16]や岩本通弥[17]によって指摘されている。それにもかかわらず福田アジオは、重出立証法では民俗の変遷過程を実証することなどできない、と声高に叫び続けているのである。

視座B

視座Bは、民俗の地域差を異質な文化の違いに基づくとする解釈である。系統を異にするいくつもの文化（種族）が日本列島に渡来し、混淆する中で日本民族が生成し、日本文化が形成されたとする。その混淆が完全に成し遂げられていないため、地域によって民俗差が残っていると見なすのである。すなわち、民俗の地域差を文化系統の違いに還元して説明しようとする立場である。

その代表的研究者が、種族文化複合論を提唱した岡正雄[18]であるが、同時期に騎馬民族征服王朝説を唱えた江上波夫[19]や、アジア的視点から日本の農耕文化を論じている佐々木高明[20]、あるいは形質人類学の研究成果から日本人の二重構造モデルを提唱している埴原和郎[21]もこの文化系統論者に含めることができよう。

民俗の地域差を文化系統論で解釈することに対して、柳田は消極的ではあった。だが、日本文化が複数の異文化によって成立していることは認めていた。それは次のような文章に見ることができる。

文章⑥「現在の我々日本国民が、数多の種族の混成だと云うことは、実はまだ完全には立證せられたわけでも無いようでありますが、私の研究はそれを既に動かぬ通説となったものとして、乃ち此を発足点と致します。[22]」（大正六年）

文章⑦「日本人を構成して居る種族には、もと明らかに二以上の別があって、二千年間の融合は完全にこれを混一したようではあるが、尚大数現象によって最初の土着者の特質が察せられる。[23]」（昭和四年）

文章⑧「私は日本民族の構造については、今までだって人種の混淆ということを認めている。決して単一な民族が成長したものとは思っていない。[24]」（昭和二四年）

文章⑨「文化が遅れ先だって同じ一つの段階を登るということについては、かなり有力な異論がある。伝播説はたしかに一部の真があり、異系文化の存在することも、確実である。従って、この適用には制限が必要である。[25]」

こうした柳田の発言は、文章①の「本来一つの根源に出づる」とか、文章④の「もと〳〵同じ民族だから」とする内容とは明らかに矛盾している。この点について千葉徳爾は、「柳田が予想していた日本民族としての固有文化は、せいぜいここ二〇〇〇年程度の短期間に成立したものであったらしい。すなわち、かれは水稲栽培民族としての日本人だけを考えているのである。その中でも、とくにかれが解明する必要ありと考えていたのは、室町期以後の、つまり荘園が解体して今日の地域社会の原型である郷村が形成されてからの、農民生活であった。だから、そのような時間的限定の中では、かれの前提条件はほぼ満足されているとみてよい。[26]」と解説している。

系統の異なる異質な文化がいつくも参加することで日本文化が形成されたことは、柳田國男も認めていた。問題となるのは、その中の稲作文化を中核として日本文化が形成される過程で、他の文化が異質性を失くして均一化され、同質な文化として生成しているのかどうかである。文章⑨の中で柳田は「この」=「文化が遅れ先だって同じ一つの段階を登るということ」の適用、つまり重出立証法の適用には「制限が必要である」と述べているのだが、果たしてその制限が郷村の形成以降に限定することで解消されるのであろうか。郷村成立以前に存在した異質な文化が残っていないと断定できるのか。「モチ無し正月」という民俗の成立を、系統の異なる稲作文化に畑作文化が吸収される中で生まれたと説く坪井洋文の研究[27]は特に有名であるが、現在伝承されている民俗がすべて稲作文化を基盤として生み出されたものといえるのか疑問視されている。その点からすれば、民俗の地域差を文化系統の違いとする視座を無視することはできないであろう。

視座C

視座Cは、伝承地域の特殊性によって民俗の違いが生まれていると見なす立場である。民俗の地域差とその要因を合わせて地域性と呼んでいる。地域性については筆者もかつて一文[28]を発表したことがあるが、地域差をもたらしている要因としては、その地域の地理的位置関係（山間地か平野地か、あるいは都市近郊か）、歴史的支配関係（藩政村時代に天領であったのか、あるいは大名・旗本領・寺社領であったのか）、農業（稲作・畑作）や漁業・林業などの生業関係、他地域との交通交易が盛んに行われたのかどうか、それに伴ってどのような行商人や旅芸人あるいは宗教者などが往来していたのか、さらにはどのような宗教宗派が卓越していたのかといったことが考えられる。[29]

柳田國男も、民俗の地域差を時代差と捉える視座ばかりではなく、地域性の視座から捉えようとする方法も示しているのであるが、このことはほとんど注目されていない。

文章⑩「同じく水の神の祭であっても、旱を畏れる土地に住んだ者と、汎濫の悲しい経験を持つ者とは、する事や唱え言

が別であろう。（中略）其他平地から入込んだ者がヲコゼで山の神を祭り、山から野に下った人々が永く雷雨の神を尊崇する類は、村毎にでも色々な歴史を物語るかも知れぬ。[30]」（大正八・九年）

文章⑪「村々の祭典の変化は、必ずしも一系統の進歩過程の各段階を代表して居るものとは限らぬ。中には司祭者や従員の信仰と空想とから、各個別々に生れたものもあるらしい。[31]」（昭和十年）

文章⑫「読者に念頭に置いてもらいたい一事は、我邦の沿海地帯が広くなり、文化の中心が世と共に平野に移って来たことである。山を背後に持たない都邑と生産場が多くなれば、古い信仰は元の解釈を保つことが六つかしい。[32]」（昭和二二年）

文章⑬「日本は国自体が島国を成しているばかりでなく、周囲には大小千を数える島嶼を持っております。そこには自然や社会環境の相異によるさまざまの生活状態がありますが、また島としての共通性もみられます。[33]」（昭和二五年）

もう、これで十分であろう。福田アジオ説は間違っている。昭和十年以前も以後も、柳田は民俗の地域差を時代差だけに限定して解釈していたわけではない。旱魃地域と水害地域とでは、水神信仰に違いが見られるであろうと、自然環境による地域差を予想している。平地から山地へ、逆に山地から平地へと人が移動することで、民俗に変化が生まれる可能性を示唆している。文章⑬に「自然や社会環境の相異によるさまざまな生活状態」とあって、自然環境だけでなく社会環境の違いによっても地域差の生じることを認めている。社会環境とは、家の結合形態・社会組織の有り方・婚姻制度・寺院の宗派などのことであろう。

文章⑪で、村の（神社）祭典に見られる変化（地域差）が「必ずしも一系統の進歩過程の各段階を代表して居るものとは限らぬ」と断言しているのは、福田アジオ説を完全に否定し去るものである。村祭りの地域差が「司祭者（神主）」や「従者（巫女など）」によって生じる可能性を指摘している。宗教者による信仰伝承への影響については筆者も論じたことがあり、[34]十分に説得力を持っている。

文章⑫は、山中他界観の変化について論じたものである。山頂に死者の霊魂が鎮まるとする山中他界観は、山麓に暮らす人々にとっては受け入れやすいけれども、山麓から遠く離れた平野部で暮らすようになった人々にはもはや信じることができなくなってしまう。これもまた、自然環境によって地域差が生まれる可能性を示唆するものである。

三　憂国の学問としての日本民俗学

柳田國男が中心となって樹立された日本民俗学を支える大黒柱の一本は、憂国思想である。これまで確認してきた民俗の地域差を捉える三つの視座を、柳田はすべて獲得していたわけであるが、それぞれの視座の底流にあるものこそ憂国思想に他ならない。日本国全体の未来を案じる柳田國男に対し、一地域のみの歴史や文化を研究しようとする「個別分析法」とでは、同じ価値観を共有することなどできるはずもない。

憂国思想は、柳田國男に特有なものではない。将軍が君臨していたとはいえ、イエ意識に支えられた諸大名が半ば独立状態の大名連合国家とでも呼んだ方がふさわしい江戸時代から、西欧諸国に対応すべく天皇を中心とした近代国家に生まれ変わろうとしていた幕末から明治維新にかけて、憂国の志を持った人物は数多くいた。吉田松陰・坂本龍馬・西郷隆盛など、数え挙げればきりがない。明治八年生まれの柳田もそうしたひとりに過ぎない。後に柳田と神道について論争した河野省三もまた憂国思想の持主であった。

文章⑭「実際我々は未だ曽って国全体ということを本当に考えたことがないのではなかろうか。大体国という言葉を学者は使っているけれども、実際に、国全体を考える機会が以前は少なかったと思うのです。（中略）社会は概念の上にはあっても、未だ曽って国全体の結合をしたことがなかった。[35]」

では、何故「国全体」を考えなければならないのか。それは多数者（都会）の利害が優先され、少数者（地方）の幸福が無視されてしまうからである。多数決をすれば、人口の多い都会が勝つに決まっている。地方の幸福を考えるためには、国をひとつの社会として認識しなければならない。だが、日本にそうした思想は育ってはいなかった。柳田は次のようにも述べている。

文章⑮「四本の指を斯う並べたような隣同士の谷でも、決して一方の状態を以て他を推すことは出来ぬのであった。然るにも拘らず、学問にまで過半数主義が入って来て、平地の経済が僻村の利害を無視して説かれるようになると乃ち孤島に住み山間に在る者が悩まなければならぬ。[36]」

ここには、『北小浦民俗誌』を柳田が「なにゆえに」書かねばならなかったのかが語られている。憂国の思想が滲み出ているではないか。それゆえ柳田を近世国学の継承者と見る向き[37]もあるが、それもまた誤解に過ぎない。憂国思想は共有しているが、柳田國男の学問に復古思想や国粋思想・愚民思想などは存在しない。柳田は近世国学を一部認めてはいたものの、全体としてはこれを否定している。それは次のような文章を読めば明らかであろう。

文章⑯「平民の常の言葉などは文字を以て現すの価値も無きかの如く考えて居た。是くらい馬鹿げた心得違いは無かったのである。所謂漢学の是が最も恕すべからざる短所であった。賀茂真淵本居宣長等の国学者は起って勇敢に之を争ったことは事実であるが、しかも此一派も亦、現代に通用せぬ古文を復活したばかりで、所謂俗人の之に親しみ得なかったことは同然であった。[38]」

文章⑰「国学には万葉期以前の古意を掬もうとしつゝ、歌だけは仏教文化の影響の大きかった時代の風に追随したことは、実は本居翁なども持って居られた不調和な両立であります。[39]」

では、柳田の学問の基底に流れる憂国思想は、何に拠ったのであろうか。筆者は、それを「法華経」だと考えている。「我日本の柱とならん。我日本の大船とならん。」と高らかに唱えて立宗宣言したのは日蓮であった。その日蓮が根本経典とした「法華経」の中に、柳田の歴史観である創造主義民衆史観が垣間見えている。[40]

街づくりや国づくりは、地域住民や国民が主体となって取り組まなければならない課題である。歴史創造の主体は地域住民であり、国民自身であるとする創造主義民衆史観もまた、『北小浦民俗誌』を書く動機のひとつであった。

四　『北小浦民俗誌』の意義

㈠　民俗誌とは何か

柳田國男の『北小浦民俗誌』を分析する前に、まずは「民俗誌」の位置付けから始めたい。字義通りに解釈すれば、「誌」は「記録」の意味であるから、民俗を記録した書物が民俗誌ということになる。民俗を調査項目に従って記録した書物ということであれば、報告書と呼んでも差し支えはない。実際、報告書類を集めて「民俗誌」を謳っている出版物は多く見受けられる。例えば角川書店刊『日本民俗誌大系』（全十二巻）や三一書房刊『日本民俗誌集成』（既刊八冊）などがそうである。『北小浦民俗誌』は、『日本民俗誌大系　第七巻北陸』に

収録されているが、その特異性は他と比較すれば一目瞭然である。『北小浦民俗誌』は調査項目ごとに記述されてはいない。

『日本民俗誌大系』の代表編集者である和歌森太郎は、「民俗誌は、日本なら日本での、あらかじめ設定した大小の地域ごとに、民俗学が含むべき伝承文化、慣行習俗の内容を、事項種目別に、忠実に記録叙述しておき、その上で日本民俗学として重要となる、あるいは比較資料となる事実の提供に資する。そういう類のものをいう。[41]」と、民俗誌を位置付けている。この一文の中でキーワードとなるのは「あらかじめ設定した大小の地域」と「事実の提供に資する」のふたつであろう。前者は対象地域を日本全土ではなく特定地域に限定することを指し、後者は研究ではなくて調査報告に徹することを示している。

対象地域を限定しようとするのは、外形的には同じ民俗でも、伝承地域毎にその民俗の有する存在意味が違うのではないかとする配慮が働いているからであろう。これは、日本列島をひとつの伝承単位と見なして、項目別に調査資料を記述した『山村生活の研究』や『海村生活の研究』に対し、山口麻太郎から調査地域に伝承されてきたという事実が無視されているとする指摘[42]を受けたことと関係していよう。事実、その後に出版された『離島生活の研究』では、調査項目別ではなく、調査地域毎に資料がまとめられている。

桜田勝徳が昭和九年に発表した『海村民俗誌』では、調査地の枠が取り払われ、項目別に資料が並べられていた。これに対して、その後の論稿では「時と場の限定ある村を構造的に、全体的にとらえようとする計画性をもった調査[43]」の必要性を論じるようになっている。ここに「構造的、全体的」とあるように、地域に伝承された民俗は単独で存在するのではなく、他の民俗と有機的連関を保持しているのであるから、その有機的連関をブツ切りにしてはならないとする認識を獲得した結果であろう。このことにより、「民俗誌は記述において構造化されていなくてはなりません。やさしく言えば、それぞれの民俗部門である社会組織や衣・食・住生活、あるいは婚姻や葬式の儀礼などが、お互いにどのように結びついているのか、生活全体からみてどのように価値づけられているのかが、はっきりと意識されるように記述されていなくてはならない[44]」との結論に辿り着いている。

民俗誌の記述方法について、調査地域（伝承基盤）において「構造的・機能的」に民俗を記述することの必要性を認識するようになった背景には、先に挙げた視座Cの地域性論が深く関わっていると思われるのだが、その一方で「構造的・機能的」記述を真に理解できている民俗学者は、千葉徳爾など一部を除いてほとんどいないのではないか。だからこそ村武精一が「ある村落社会における民俗諸事象（信仰・祭祀組織・組結合・身分・階層・族制などなど）の、ある意味では無限的な関連のあり方を明らかにすることによって、重出立証法の限界をのりこえたと考えるかも知れない。しかしこのような方法では、文化的・社会的な事象上のリアリティーにたいする循環論法的な羅列に追い込まれる[45]」と、お調子者の民俗学者たちに苦言を呈するのである。

民俗誌をまとめる際、日本列島を単位とするのではなく、あくまでも調査地域を単位とすることで合意は得られているようではあるが、民俗誌の性格について和歌森が「事実の提供に資する」と、あくまでも調査報告書と位置付けたことについてはどうであろうか。同様な見解は、山口麻太郎の「民俗学の求むる民俗誌は、郷土住民の忠実な生活記録[46]」とする見解や、井之口章次の「民俗誌というのは、ある地域の民間伝承を、正確に記述したもの[47]」といった発言に示されている。字義的には、民俗誌は「民俗の記録」なのであるから、調査報告書としての位置付けでもよいと思われるのだが、民俗誌を研究書と位置付ける民俗学者もいる。

例えば坪井洋文は、民俗学者の役割を現実的問題の解決とした上で、「民俗誌はそうした目的を進めるために、特定の課題を掘りおこ

す作業（調査）の結果として作製されたものであるから、そこには作製者（調査者）によって掘りおこされた課題の分析と位置づけとがおこなわれている[48]」と述べて、民俗誌を研究書として位置付ける一方、調査者は同時に研究者であるべきだとの見解を示している。同様な立場は、福田アジオ[49]によっても継承されている。

民俗誌を調査報告書に留めようとするのか、あるいは研究書のレベルにまで引き上げようとするのか、意見は分かれている。中には両方の役割を有する民俗誌が理想的だとする見解[50]もあるが、柳田國男がまとめた『北小浦民俗誌』は、日本全体を射程にした研究書としての民俗誌である。

(二)「なにゆえに」――柳田國男の語りを通じて――

柳田國男に批判的な人たちは、『北小浦民俗誌』を「どのように」柳田が書いたのかに関心があるらしい。その方が批判しやすいからであろう。そのため「なにゆえに」柳田がこの書を世に問うたのかについては、ほとんど研究が進んでいないようである。

『北小浦民俗誌』以前、柳田は紀行文『雪国の春』と『秋風帖』の中で佐渡について言及している。佐渡島へ渡るのが大正九年六月十六日のことで、それからわずか二ケ月後には「佐渡の海府[51]」と題する一文を書き、六年後に書いた「草木と海と[52]」の中で人と自然との相互関係について言及し、十二年後の昭和七年十月に「佐渡一巡記」を書くが、その中でも「以前は相川の南のドロとかいう処に住んで居て、純然たる海の移住者であったらしいが、陸地に馴れると生活が少しづつ変って来る。相川の海士町などもそれより新しい土着者であるが、埋立が出来てから海に遠くなり、もはやかつぎなどをする者は居らぬそうだ。内外の海府が追々に農村となったのも、恐らくは又同じ過程を経て来たものであろう[53]。」と、人間の生活が自然環境によって大きく変化することを指摘している。

先に示した視座Cの地域性と深く関わる民俗と自然環境との関係について、柳田は早くから注目していた。大正十四年の論稿の中に「我々が個々の郷土を以て研究の目的物とする場合に、最初に出現して来る問題は、人と天然との久しい間の交渉、それが如何なる変化を生活様式の上に及ぼして居たかということである[54]。」と見えている。日本列島上、民俗はどこでも同じ変遷過程を辿るとする視座Aはあくまでも仮説を導き出すためのひとつの方法論であって、柳田のすべてではない。また、民俗の地域差を生み出す要因のひとつに行商人の存在を挙げ、「民俗の地域単位というものは、地図で考えるようなまん丸な塊では無くて、寧ろ細長い路筋を以て伸びて居るらしい[55]」とあるのは、周圏論では解決できない民俗分布があることも十分承知していたのである。この論稿は昭和二四年に書かれたものであるから、確立期以降の柳田を重出立証法や周圏論に閉じ込めてしまうのは間違っている。それらはあくまでも柳田の一側面でしかないのである。

では、なにゆえに佐渡が調査研究対象地として選ばれたのであろうか。それは島だからである。柳田は辺境の地としての島には関心が深く、島の象徴的な存在であった沖縄研究には特に注意を向けていた。その理由について、「南島研究の現状」と題する一文において次のように説明している。「色々の偏した心持ちの所謂先覚者」、つまり中央の学者や政治家のことであろうが、彼らが自分たちとは異なる生活環境の日本人を無視したまま政策を実行しようとしたことに対して、「日本の偏卑な土地の一様ならざる事情を闡明して、国の今後の政策の基礎と為すべきを主張した。たま〳〵中央に遠い地に居を占めて居たばかりに、終始他方の利害に殉ぜしむべき理由の無いことを唱導した[56]。」ためである。国全体のことを思うべきだとする憂国思想の表れである。この一文は大正十四年のものであるが、戦後に書かれた文章にも「各地域の特殊性を綜合したうえでの結論こそ正しいものでなくてはならない[57]」とか、「土地毎の沿革を念頭に置かずに、たゞ表面に

現われたものを代表として、双方の異同を論ずることの危険[58]」といった主張が見えている。つまり、佐渡島の北小浦は世間から隔絶された地域であるが故に「世に遠い一つの小浦」なのではなく、中央（都会）から無視された地方（田舎）であり、国の政策から仲間外れにされていたがために「世に遠い」としたのである。

さらにもうひとつの「なにゆえに」は、自然環境と民俗との因果関係を解き明かすためであった。千葉徳爾の提唱している地域変換法も両者の関係を明らかにするためのものなのだが、実際に運用するのは難しい[59]。民俗が自然環境の違いによってどのように変化するのか、そして変わらないものは何か。柳田は移住者を研究することでこの問題を解明しようとしたのである。柳田の提示した仮説は次のようなものであった。

文章⑱「島の最初の移住者が、多くは農民であったということは、必ずしも意外な歴史で無い。漁業を専らにする人々は、最初から交易の必要を感じて居た故に、成るべく穀物を作る村の近くに、又は来往の便宜の多い箇処に、其居を定めようとしたからである[60]。」（昭和九年）

倉田一郎の「採集手帖」を読んだ時、柳田はこの仮説を北小浦で実験できると考えたのではなかろうか。農耕民が先住者として暮らす地域に、穀物を得る目的で漁業民が後来し、定着する。元の居住地とは異なる自然環境に適応してどのように民俗を変化させていくのか。同じような研究をいくつもの地点で繰り返し行うことで、その地域特有の現象と全国に共通する現象とを見つけ出すことができると考えたのである。まさに「実験の史学」としてまとめられた書であった。そのため「名を北小浦にかりながら、実はある小地域社会の生活史を、全国の生活の中に歴史的に位置づけるための研究法の展開という、異色の内容を持つことになった[61]」ということになる。

『北小浦民俗誌』は北小浦を舞台としながら、日本を研究しようとしたのである。なぜそこまで柳田は日本にこだわるのであろうか。その理由については、次の一文にも語られている。

文章⑲「土地が変れば丸っきり一つという風俗はめったに無いと共に、元が一つなのだから何処に往っても、大抵は似よったことがきっと有る。つまりは永い月日と境遇のちがいが、少しづゝ生活様式の上に働いて居るのである。それを互いに心づくというだけでも、同朋国民の親しみは加わらずには居ない。そうして又是からはどうなるかと、いうことも考えさせられるのである[62]。」

これは戦後に書かれた文章ではあるが、同様の主張は昭和三年[63]や大正三年[64]の文章にも見えており、確立後に獲得された思想ではない。この中で柳田の一番の本願は「是からはどうなるかと、いうことも考えさせられる」であろう。もちろんこれは国の政策を指している。「考えさせられる」のは誰か。国民でなければならない。国民が主体となって国づくりを実践していかなければならないのであるが、その際中央（都会）の利害だけで政策を決めるべきではないことを憂いているのである。もちろん日本は間接民主制であるから、実際に政策に携わるのは国民から選ばれた議員たちである。だからこそ柳田は「公民としての選挙民」について熱く論じたのであるが、ここでこれ以上この問題に言及することはできない。杉本仁の研究[65]を参照されたし。

五　おわりに

柳田國男が樹立した日本民俗学は、現在学であり、そして未来のための学問である。このことは柳田の著作の中に切々と語られている。だが、このことはほとんど理解されていないようである。原因のひとつは、明治人柳田の難関な文章にある。深遠な文章に時々遭遇し、立ち往生してしまう。さらにもうひとつの原因は、真意が霞に覆われて

いてなかなか把握できない。さらに付け加えるならば、ひとつのテーマが全著作に散りばめられていて、特定の著作を読むだけでは済まされないことであろう。例えば、今回取り上げた『北小浦民俗誌』にしても、タイトルからは無関係と思われる他の著作の中に重要な言及を見付けることがある。『北小浦民俗誌』だけ読んだとしても、『北小浦民俗誌』のことは理解できないのである。このことは『先祖の話』や『海上の道』などに関しても同じで、結局『定本柳田國男集』全巻に眼を通さなければならない。

不勉強な筆者は、これまでに『定本柳田國男集』の全巻通読は四度しか経験していない。もちろん『先祖の話』や『海上の道』など、単体では十度近く読んでいるものもある。読むたびに新たな発見があり、読解力のなさを痛感させられてしまう。それでも『定本柳田國男集』全巻を奏でている通奏低音が「問いの学問」と「憂国の学問」であることは理解できている。『北小浦民俗誌』も例外ではなく、このふたつの思想がその底流に奏でられているのである。

柳田國男批判を繰り返している人々は、どれだけ正確に柳田國男の学問を理解できているのであろうか。批判するのは学問の前進のため結構なことではあるが、その際求められるのは批判する対象を正確に理解していることであろう。昨今「アカデミック民俗学」だとか「野の学問」だとか、あるいは「実践の民俗学」などと騒ぎ立てている人たちがいる。そうした人たちに柳田の学問が本当に理解できているのかどうか疑問である。柳田の直弟子のひとり竹田旦の証言によれば、民俗学が大学の科目に取り上げられることに柳田は賛成しなかった。[66] 柳田自身、大学の専任教員となることを欲していなかった。戦後、消滅しそうになっていた國學院大學神道科を立て直すため、再三の懇願に負けて専任教授を引き受けた柳田ではあるが、大学が支払おうとした給与の受け取りを拒否している。[67] 民俗学を自身の生活のための手段としか考えることのできないサラリーマン民俗学者たちには理解不可能であろう。

『北小浦民俗誌』をめぐる議論を見ていると、名称は同じでも、柳田國男や折口信夫たちが築いた日本民俗学とは異質な存在であるような気がしてならない。

註

柳田國男の著作は、特に断りのない限り筑摩書房刊『定本柳田國男集』を用いている。引用に際し、漢字や仮名を適宜改めている場合がある。

(1) 福田アジオ篇『柳田国男の世界・北小浦民俗誌を読む』吉川弘文館　二〇〇一年
　福田アジオ篇『北小浦の民俗・柳田国男の世界を歩く』吉川弘文館　二〇〇二年

(2) 篠原徹「世に遠い一つの小浦」『国立歴史民俗博物館研究報告』二七　一九九〇年
　篠原徹「『北小浦民俗誌』と佐渡」網野善彦他著『日本海と佐渡』高志書院　一九九七年

(3) 福田アジオ「『北小浦民俗誌』の意義と評価」前掲『柳田国男の世界・北小浦民俗誌を読む』三ページ

(4) 福田アジオ「民俗学」児玉幸多他編『地方史の思想と視点』柏書房　一九七六年　二四八ページ

(5) 柳田國男「実験の史学」『定本柳田國男集』第二五巻（以下、「定本二五」というように略記する。）

(6) 千葉徳爾「いわゆる『郷土研究』と民俗学の方法」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』十八　一九七三年　十四ページ

(7) 谷川健一「民俗学と時間」『谷川健一著作集』三　三一書房　一九八三年　三九七～三九八ページ

(8) 宮本常一は、民俗の地域差を生み出した四つの要因について論じている。
　宮本常一「民俗の地域性」岡正雄他編『日本民俗学大系』二　平凡社　一九五八年　六八～八〇ページ

(9) 柳田國男「後狩詞記」定本二七　八ページ

(10) 赤坂憲雄『山の精神史』小学館　一九九一年　七四ページ

(11) 柳田國男「雪国の春」定本二　一二五ページ
(12) 柳田國男「方言覚書」定本十八　二二四ページ
(13) 柳田國男「郷土研究と郷土教育」定本二四　八一ページ
(14) 柳田國男「月曜通信」定本十三　三二〇ページ
(15) 柳田國男他「民俗学から民族学へ」『柳田國男対談集第二』筑摩書房　一九六五年　七〇ページ
(16) 千葉徳爾「山の神信仰の一考察」『日本民俗学会報』六五　一九六九年　三ページ
千葉徳爾『女房と山の神』堺屋図書　一九八三年　八三～八四ページ
(17) 岩本通弥「地域性論としての文化の受容構造論」『国立歴史民俗博物館研究報告』五二　一九九四年　二五ページ
岩本通弥「戦後民俗学の認識論的変質と基層文化論」『国立歴史民俗博物館研究報告』一三二　二〇〇六年　五二ページ
(18) 岡正雄『異人その他』言叢社　一九七九年
(19) 江上波夫『騎馬民族国家』中央公論社　一九六七年
(20) 佐々木高明『日本文化の多様性』小学館　二〇〇九年
(21) 埴原和郎『日本人の成り立ち』人文書院　一九九五年
(22) 柳田國男「山の人生」定本四　一七二ページ
(23) 柳田國男「ジュネーブの思い出」定本三　三三八ページ
(24) 柳田國男他「日本人の神と霊魂の観念そのほか」前掲『柳田國男対談集第二』九ページ
(25) 柳田為正他編『柳田國男談話稿』法政大学出版局　一九八七年　一八一ページ
(26) 千葉徳爾「地域研究と民俗学」和歌森太郎他編『日本民俗学講座』五朝倉書店　一九七六年　九五～九六ページ
(27) 坪井洋文『イモと日本人』未来社　一九七九年
(28) 高見寛孝「日本民俗学と地域研究」『梅光女学院大学地域文化研究所紀要』十　一九九五年
(29) 赤田光男『祭儀習俗の研究』弘文堂　一九八〇年　六ページ
千葉徳爾「民俗の地域差と地域性」『日本歴史論究　考古学・民俗学編』東京教育大学　一九六四年　九九～一〇〇ページ
千葉徳爾「民俗の地域性」和歌森太郎編『志摩の民俗』吉川弘文館　一九六五年　四六ページ
(30) 柳田國男「武蔵野の昔」定本二　三四九ページ
(31) 柳田國男「郷土生活の研究法」定本二五　二九一ページ
(32) 柳田國男「山宮考」定本十一　二九一ページ
(33) 柳田國男「趣旨」日本民俗学会編『離島生活の研究』集英社　一九六六年
(34) 高見寛孝「山口県萩市木間の森祭りと神々」『國學院大學日本文化研究所紀要』七九　一九九七年
高見寛孝「竈神信仰の地域性」『悠久』一五五　二〇一八年
(35) 柳田國男「村の信仰」『伝統と現代』三四　一九七五年　一五二ページ
(36) 柳田國男「郷土研究ということ」定本二五　二一七ページ
(37) 大久保正「柳田国男における国学の伝統」後藤総一郎編『柳田国男研究資料集成』二〇　日本図書センター　一九八七年
佐谷眞木人『柳田国男』小沢書店　一九九六年
芳賀登『柳田國男と平田篤胤』皓星社　一九九七年
(38) 柳田國男「国語の管理者」定本二九　二二二ページ
(39) 柳田國男「菅江真澄」定本三　三九八ページ
(40) 高見寛孝「柳田國男と牧口常三郎」『二松學舍大学論集』五八　二〇一五年
(41) 和歌森太郎「解説」和歌森太郎編『日本民俗誌大系』七　角川書店　一九七四年　四八八ページ
(42) 高見寛孝　前掲「日本民俗学と地域研究」
(43) 桜田勝徳「地域と社会――村と町」岡正雄他編『日本民俗学大系』三平凡社　一九五八年　十三ページ
(44) 千葉徳爾『民俗学のこころ』弘文堂　一九七八年　一八八ページ
同様な見解は、他の民俗学者たちにも共有されている。
天野武「民俗誌雑感」前掲『日本民俗誌大系』七（月報）
佐久間惇一「民俗誌のことども」『日本民俗学』一一三　一九七七年　三八ページ
山本質素「日本民俗学における『地域差』と『地域性』概念について」前掲『国立歴史民俗博物館研究報告』五二　二四六ページ
篠原徹　前掲「『北小浦民俗誌』と佐渡」　一一四ページ
(45) 村武精一「重出立証法批判者の批判性」『季刊柳田國男研究』六　白鯨社　一九七四年　七八ページ
(46) 山口麻太郎「民俗誌私論」『日本民俗学』一一三　一九七七年　二二

ページ

(47) 井之口章次「民俗誌小考」『同右』　三二ページ
(48) 坪井洋文「自己発見のための民俗誌」和歌森太郎他編『日本民俗誌大系』五（月報）角川書店　一九七四年
(49) 福田アジオ　前掲「民俗学」　二四二ページ
(50) 岩崎真幸他「＜民俗誌＞の系譜」『日本民俗学』一一三　一九七七年十九ページ
(51) 柳田國男「秋風帖」定本二
(52) 柳田國男「雪国の春」定本二
(53) 柳田國男「佐渡一巡記」定本二　二〇六ページ
(54) 柳田國男「郷土研究ということ」定本二五　二一八ページ
(55) 柳田國男「東国古道記」定本二　二六二ページ
(56) 柳田國男「南島研究の現状」定本二五　一六三ページ
(57) 柳田國男「故郷七十年」定本別三　六九ページ
(58) 柳田國男「海上の道」定本一　五七ページ
(59) 高見寛孝「長崎県平戸市と山口県萩市の民俗差に関する一考察――千葉徳爾氏の地域変換法を手がかりとして」『國學院大學日本文化研究所紀要』八五　二〇〇〇年
(60) 柳田國男「島」定本二　三八三ページ
(61) 千葉徳爾　前掲「地域研究と民俗学」一〇一ページ
(62) 柳田國男「村のすがた」定本二一　四一三ページ
(63) 柳田國男「雪国の春」定本二　三ページ
(64) 柳田國男「郷土誌編纂者の用意」定本二五　八ページ
(65) 杉本仁『選挙の民俗誌』梟社　二〇〇七年
(66) 竹田旦「民俗学会創設のころ」『日本民俗学』二三〇　二〇〇二年
(67) 高見寛孝『柳田國男と成城・沖縄・國學院』塙書房　二〇一〇年

追記

本稿脱稿後、杉本仁氏から近著『柳田国男以後・民俗学の再生に向けて』（柳田国男研究会編、梟社）を御恵与いただいた。歪められてしまった「日本民俗学」を元の、あるべき姿に戻そうとする熱き信念に溢れた玉稿が多く収められており、本稿にとっても益するところ大である。しかしながら、そうした研究を本稿に取り入れて書き直す気力もなく、今後の研究の参考にさせていただきたい。